

# 【みんなでやろうまいか、古民家再生】 めぞそう空き家「ゼロ」の農山漁村



2019年10月31日 2019年度第4回(通算138回)農山漁村コミュニティ・ビジネスセミナー【講師】講師:奥矢作移住定住促進協議会 会長 大島 光利 氏(岐阜県恵那市)を開催しました。

農山漁村の空き家問題は、個人情報への壁に阻まれた、権利者へのアプローチから始まる。親戚など縁者の伝手をたどり、足を運びこと1年半。やっと空き家の権利者に会い、意向を確認する。この地道な空き家調査が、集落再生の希望の光をもたらしたのです。

2000(平成12)年9月、最低気圧925hPaの台風14号が、南鳥島海上で発生し沖縄を通過し朝鮮半島に上陸しました。この台風により九州・西日本は暴風雨、中京圏も記録的な大雨となり、大きな被害を及ぼしました。後に激甚災害に指定され東海豪雨と呼ばれています。当時消防本部の幹部だった大島会長は、上矢作に10日間ほど通って、救助活動に従事しました。台風の後、上矢作ダムには、大量の流木が流れ込んでいました。ダムの惨状を見て、ダムがこの流木をせき止めなかったら下流域は大変な災害をもたらしたはずだ、やはり災害を防ぐためには“山を再生しないとダメだ!”という結論に至り、退職を契機に仲間たちを募りNPO法人 奥矢作森林塾を設立しました。

森林塾は、山の手入れを進めるとともに、高齢化により目立つようになってきた空き家問題を解決すべく取り組みを始めました。

山の手入れは、ダムに流れ込んだ流木を片付ける炭焼きの窯を設置(国土交通省事業)。空き家問題の解決には、持ち主を探し意向を調査(農林水産省事業)しました。

この意向調査の結果、村に戻らない空き家(空き家を譲っても良い)については、移住者を受け入れることを考えて、自分自身の手で古民家のリフォームをみんなでやってみようではないか?という企画を立案実行しました。最初は、移住希望者に参加してもらう呼びかけに苦労しましたが最初の塾の参加者が3人移住したことをきっかけに、クチコミなどで広がっていきました。



平成12年9月12日矢作ダムに流入した流木（約35,000m<sup>3</sup>）

リフォーム作業は、素人では不安がありますので、塾生は地元のプロの大工さんに指導を仰ぎ、安全対策も含め、家を作るための基礎技術を習得しつつ古民家を自分の住む家として改修します。

家は、空き家も持ち主から購入しボランティアの協力も得て作業します。この空き家リフォーム塾は、各回1泊2日。移住希望者は、四季折々の串原を見てもらえるようになりました。我々も皆さんと同じ釜の飯を食べてみれば、その“人となり”が分かるのです。



築200年の古民家  
通称「おやしき」



「解体作業」



大引及び根太の取付



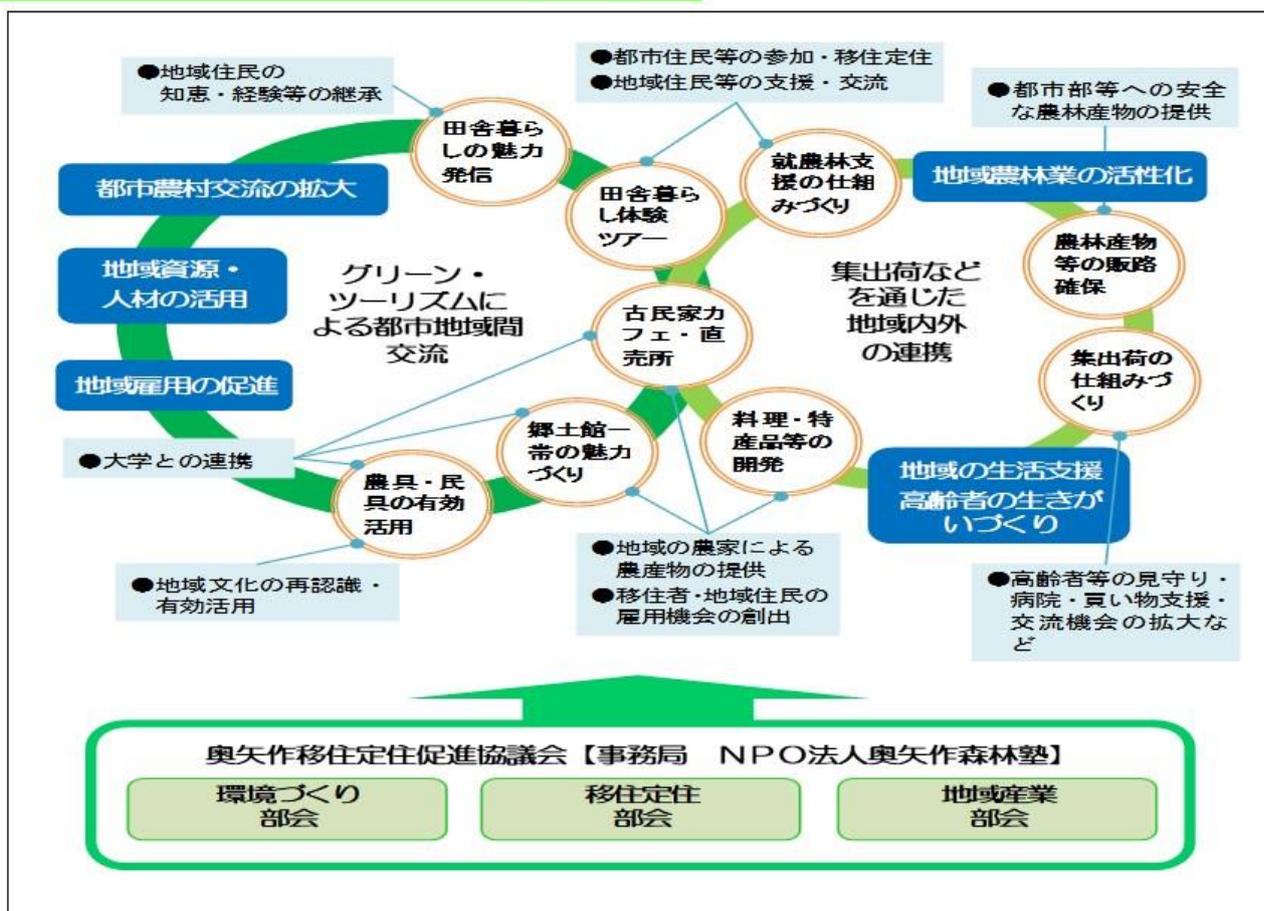
「囲炉裏」完成

最初にリフォームした古民家は、囲炉裏や釜土のある暮らしが体験できる体験施設、結の炭家(ゆいのすみか)として再活用されています。串原には最初、みんなが泊まる場所もわいわい騒ぐ場所もありませんでしたが、結の炭家(ゆいのすみか)をみんなの手で一緒に作り上げたことは大きな自信と集まる場所となりました。

移住後新規就農した若者は、東農地区の野菜部門で優秀賞を獲るほど活躍しています。また既に、協議会の事務局も移住者によって担われています。小学校を廃校の危機から守るためにも子育て世代の移住が効果を上げています。何気ないことですが、地域の人々が楽しめるイベントを毎月開催することで、交流の輪も得られています。ちょっとした話し合える関係、交流の場が、山村集落の新たな活力に結び付いているのではないかと思います。

空き家の所有者を調査する。流木を処理する。空き家改築を大工さんから学び実行する。間伐材を切り出し利活用する。炭焼きを行いダム湖の流木を処理する。また、ダム湖に溜まる砂を利用し芋づくり、ダム湖でカヌー講習会を開き交流人口を増やす等々、問題を直視し課題解決手法をみなで実行する、合意形成のための寄り合いではなく、地域を良くして、楽しむための顔合わせをしていこうとする大島さんの意気込みをひしひしと感じました。講師の大島会長、セミナー参加者の皆さん、ありがとうございました。

## 奥矢作移住定住促進協議会の取組



炭焼きの里 「森林窯・湖畔窯・やはぎ窯」



日本一の  
「森林窯」  
流木・間伐材を  
一度に60m<sup>3</sup>炭化



昔ながらの  
「湖畔窯」  
3m<sup>3</sup>炭化



研修窯の  
「やはぎ窯」  
ステンレス製200L

